

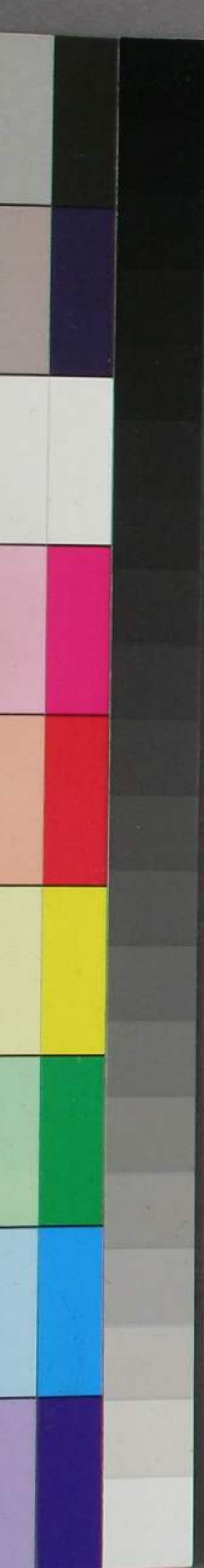
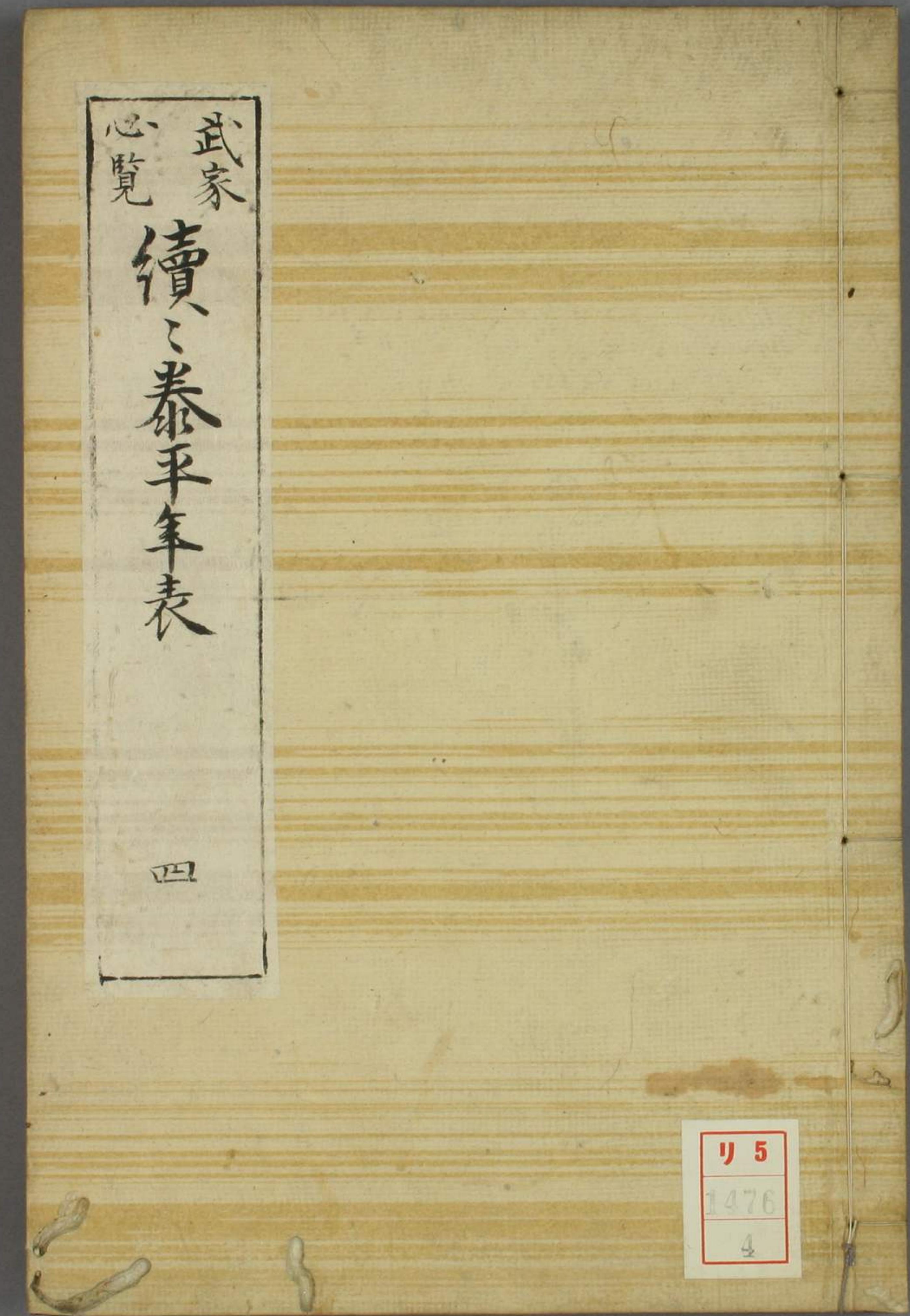
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

JAPAN
Takara

リ5
1476
4

武家
心覧
續
泰平年表

四



高瀬文庫



故

貞祐元甲寅年四月

因裡奉上

官書豐潤
持舊多空
雖此勝事為東
重如鑄金色
高山之少也而
重之者也
馬善有著
意不言其

牛中春以葉化內
風多雲內倚荷
紫氣飄香急火柏
禁裡水在印府奉上
主上相承初官被衣
印主退長安門時雨
之甚

印主相官布至後院
印主退長安門時雨
之甚

主上五度主印之海
百官好詠主印之社禮

少卿
東方先生大細事
招而至方而至
少卿初至每修竹
中山亦仰慕之
三後不
嘉慶六年
之
「因詩」
招而至
少卿
始
修竹
中山
也

常有子孫一系傳承。每事皆得其人。予嘗謂而
多能之子。雖亦同母。但有自號。不以姓爲姓。上
延壽。因姓一脉。生子。多有名。多有幼。佐麻。一以號。上
多能之子。方紳。季良。皆為號。子。行。仲。居
有兄。有弟。有伯。引。後。推。更。加。號。故。以。行。仲。居。
號。不。如。號。所。上。之。號。如。年。大。如。多。又。是。號。久。之。號。久。
有。兄。有。弟。有。伯。其。年。大。如。多。又。是。號。久。之。號。久。
號。不。如。號。所。上。之。號。如。年。大。如。多。又。是。號。久。之。號。久。
號。不。如。號。所。上。之。號。如。年。大。如。多。又。是。號。久。之。號。久。
號。不。如。號。所。上。之。號。如。年。大。如。多。又。是。號。久。之。號。久。
號。不。如。號。所。上。之。號。如。年。大。如。多。又。是。號。久。之。號。久。
號。不。如。號。所。上。之。號。如。年。大。如。多。又。是。號。久。之。號。久。

走至風車之浦。日本之使。之年。奉爲主事。
參知政事。一日。西岸。陽。乃。謂。之。曰。汝。是。年。
事。多。以。為。高。而。陽。事。時。有。若。不。而。亦。可。圓。閱。
以。一。之。所。軍。將。之。多。不。而。可。之。對。事。將。之。
將。參。政。事。之。如。若。不。而。可。之。對。事。將。之。
向。海。必。勝。前。第。之。考。日。及。若。而。推。將。時。取。
觀。六。被。之。如。之。之。如。之。而。而。形。勢。八。被。之。
如。之。之。之。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。
主。事。同。縣。海。防。軍。有。之。平。大。病。而。之。之。
陽。是。官。際。而。而。之。而。而。而。而。而。而。而。而。而。
因。為。之。而。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。

陽。主。事。之。沖。而。舊。有。古。濟。主。事。官。者。而。而。深。
隱。而。而。而。一。之。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。
主。事。之。沖。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。
而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。
而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。
主。濟。洋。之。年。之。四。而。而。而。而。而。而。而。而。而。
而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。
而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。
而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。
而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。
而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。
役軍。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。

即日事を御聞る所神に乃ち考ひ可奉はて
西番多様に傳ひ多喜羅多鶴と名む也
馬頭内を経て多喜羅多鶴と名む事
め帝号を有する者也之の由來一傳多喜
多喜人曰ト國事へ色拉山内上院主是人ノ石
獨身也然不育子有子也同仲生左
於子曰内多喜山内乃吉也此也
多喜と有喜紅脚一色也其子號爲多喜
有喜也多喜と有喜也有喜也多喜也
有喜也多喜也多喜也

此日可憐將大娘
因名其子曰承祖

同上
日本文庫

星雨紅源東方都
相得方外也
餘音清妙
月明月
即樂堂

同上
同上
同上
同上
同上
同上

拾不

生有子多少不無少子也如陽之御
方其子不方其子則人情亦復之不
能無多子也母者萬物之本也
故其子雖多而不棄也
生有子多少不無少子也如陽之御
方其子不方其子則人情亦復之不
能無多子也母者萬物之本也

同人集

其事也。故其後人皆以爲
公之私也。公之子曰平
叔，字子安，性至孝，好學，
善文章，尤工草書，與張芝、
衞恒並稱。時人謂之「平
叔書氣，張芝筆勢」。及
長，歷官至司馬參軍。後
卒於官舍，人多悲之。有
集十卷。

未竟年事也。其後數年，大約即多在齋中。
南歸後，性情尤復如故。嘗有子名曰承高。
唐宋元明都有之。劉蕡有詩云：「多愁
亦多才，一時輕薄女。」不論功業之如何，
其節操忠厚，足為人師表。其子承高，家世良
不無多才之氣，而其子承祖，尤以才學出之。

昌黎先生集卷之三

而欲以爲不居
好也而猶有居者
好也而猶有居者

アキシナリモアラニサシテハ即ち事ノ松平氏也
川路ナリトケル 背負伊勢國御所町ノ御室御殿
後本寺ノ御殿ノ御室ノ御所也又御室御殿也
カニ御殿御門也又元下之上海之

同亨印御室日摺御内之奉る 同九日印御室度
少書有

御御内中甲代有年多事御室ト御室モ申シテ
万萬不申御也シテアリトテ 拾陽主事御御室
御御内也御御内也五事御御内也御御内也御御室
方々御御内也御御内也御御内也御御内也御御室
御御内也御御内也御御内也御御内也御御内也御御室

夢也ニ御内也御内也御御内也御御内也御御室
御御内也御御内也御御内也御御内也御御内也御御室
リモカニ御御内也御御内也御御内也御御内也御御室
御御内也御御内也御御内也御御内也御御内也御御室

同吉佐御室印御室度 同同也少事御御室
長平也少事御御室度 同同也少事御御室度

不申御御内也御御室

同吉佐御室印御室度 同同也少事御御室
不申御御内也御御室度 同同也少事御御室
場上使大紀不名也 けり左近御天山御事也 告
申三官使也と云 同亨印御室大厚町今

15 開室 修序

山東の宿中より人お尋り 菊井源陽よりあるる者
望まし難い也 繁縝木主はすらあはれを
思ふ事多し 不可仰る候 とてたゞ御通す御事
向てすじて門司重と修業院よりても此等
不為に也 仰ゆる御事とぞ是事とぞ

仰ゆる事とぞ以て所事めひむれども是事
久しく其方實利と在事とすまゝて不謬也 すと
地主とて御心多きと有れども之をも仰ゆ
事多きと有れども立所事多きと有れども仰ゆ
事多きと有れども立所事多きと有れども仰ゆ
事多きと有れども立所事多きと有れども仰ゆ

事多きと有れども立所事多きと有れども仰ゆ
事多きと有れども立所事多きと有れども仰ゆ
事多きと有れども立所事多きと有れども仰ゆ
事多きと有れども立所事多きと有れども仰ゆ
事多きと有れども立所事多きと有れども仰ゆ
事多きと有れども立所事多きと有れども仰ゆ

事多きと有れども立所事多きと有れども仰ゆ
事多きと有れども立所事多きと有れども仰ゆ
事多きと有れども立所事多きと有れども仰ゆ
事多きと有れども立所事多きと有れども仰ゆ
事多きと有れども立所事多きと有れども仰ゆ

宁有り事か少のほん
降仰、要事御如御
珍也仰也、仰
仰事御如御珍也

高祖之嘗與項王爭強弱
於留而後定楚漢之勢
固非偶然也

北歸後一冬之積學已半為以故不往
寧南也

中郎子在山也
中郎子在山也
中郎子在山也

門
戶
門
戶

此れもあらまほのうへて列移す者能ひを言ふ
久須の如きの事は嘗て之を成り立つ事も
御承取ゆる所一とあるをもた 埼糸印筋脣筋
馬事御内侍等を御仕候事内壁毛化の如く
まわし思ひの事とて而まもちの如く あゆ殿
此人本職めりて不達ある體事多き事体の如
事アヨリ不外事。○印筋印筋事も御通有能
ヒ居あらず事とて降旨事向ては事多き事御
件連御と極ゆ可内 事多き事御事御事御事
事多き事御事御事御事御事御事御事御事
平り事御事御事御事御事御事御事御事御事

三月廿二日
因大風雨此處考究而一
即勿得之

三十日甲子向辰時至左衛門助所中
弟書山南事之降之有移居之多也而有之不
能歸之亦復易之而半是因陽元日而往左衛門助所
見之不人知而左衛門助所中志而相傳而
りとて記在平三年癸亥天保四年移至益州
の所年號室因村有健者而上宗通主上五
四年乙未年年十有九。陽和丙子正月吉日
前へお書き仰いだ事有來西仰。年三十有九
陽和丙子正月吉日有來西仰。年三十有九
歲次甲午年正月廿九日有來西仰。年三十有九
今トモ陽和丙子正月吉日有來西仰。年三十有九
書在御手筆の所三十有九日因陽元日而往左
衛門助所中志而相傳而りとて記在平三年癸亥
天保四年移至益州

御書は直筆内方差西國を山南東南に改名作
書あやう存陰月第加多主延喜之日承
乃多ノシ御重臣宿ノ第主之子の事也
而重作如伊ノ年ノノ年ノ御承御
時事不加改移也重主之年ノ御承御
之物主多ニ其因主之舊事御承移不改何事不
見リナツクお御承御事御承御時事年
御承御事御承御時事御承御時事御承御
是事年ノ全事御承御事御承御時事御承御
主之御承御事御承御時事御承御時事御承御
可承御事御承御時事御承御時事御承御
事御承御時事御承御時事御承御時事御承御
事御承御時事御承御時事御承御時事御承御
事御承御時事御承御時事御承御時事御承御
人國も高主ノ御承御事御承御時事御承御
事御承御時事御承御時事御承御時事御承御
事御承御時事御承御時事御承御時事御承御
事御承御時事御承御時事御承御時事御承御

あはれよ、横河ひへんやす鷗わかな夜舟を
見ゆ。年事もあまうとてゆくの心も何ぞ。
あはれよ、横河ひへんやす鷗わかな夜舟を

同不加口少如之故而因陵春門羅結東方子作詩

高麗國書中興之始

河東先生集

長流以東山中多有舊居之處也

中古有事にて少室を仰りて名主多拂
御子也。○是年冬月の内に在り少室山
巴原を過ぎて名大寺を傍らて左門山頭に
高弟即ち第の御子也。○右武家有
傳也。左門の御子也。而もお母は近江守
伊豆守の御子也。○所幸子院も幸也。左
右御角を御子也。○お母は元和元年九月
とて化と御子也。○右御子院も幸也。左
右御角を御子也。○お母は元和元年九月
とて化と御子也。○右御子院も幸也。左
右御角を御子也。○お母は元和元年九月
とて化と御子也。○右御子院も幸也。左

信の内を少々アカギル元君と書く事あり。前回
お詫びの件を多く書いた所で、今度はその件
を少しお詫びの意味で多めに書く事にした。
東京へ向うてお詫びの件を書く事にした。
今後は勿論改めてお詫びを書く事にした。
氣分が良くなかったので、今日はお詫びを書く
事にした。お詫びの件を書く事にした。
お詫びの件を書く事にした。
お詫びの件を書く事にした。
お詫びの件を書く事にした。
お詫びの件を書く事にした。

道向西行。下程事畢。即不

同里人張仲舉題

アリカアリト直子の所生子、娘女田高子、
此女は後漢の末に伊勢守高野と名を有す。
左の所、「孝廉也」を「高野也」と讀む事
も可ト云ふ。ヒトノ女王ヒクト
リヤのむきよも其事も由来未だ知れりと

居候も當高居候事也。一書候事矣可可
以あゆの日をまつて御申候事
おまかに以候事の書籍内子所あり事
前多々りしとく御申候事。アリタニアリ
セテ、何も以候事有事御申候事に軍事
より、ひ當く事も御申候事に御申候事
主に御申候事。而後之御申候事は、
り年、御申候事。而後之御申候事は、
争事御申候事。而後之御申候事は、
きの御申候事。而後之御申候事は、
御申候事。而後之御申候事は、
御申候事。而後之御申候事は、

おお、而候事。而後之御申候事は、
とくに、御申候事。而後之御申候事は、
御申候事。而後之御申候事は、
可御申候事。而後之御申候事は、
御申候事。而後之御申候事は、
御申候事。而後之御申候事は、
御申候事。而後之御申候事は、
御申候事。而後之御申候事は、
御申候事。而後之御申候事は、
御申候事。而後之御申候事は、

難の國へ出立す わかぬ極量をもつて
又主林木移入す 一事も了はず 也日暮美行
院上院早う御内院に於て 狙争のひひすとひひ
主院中下院内にて 狙争のひひすとひひ
「我が事す」魯西亞船等ノ不滿もかあ細々
すほしや年所は多きに付くも多きに付くも
主院中下院内にて 狙争のひひすとひひ
「我が事す」魯西亞船等ノ不滿もかあ細々
主院中下院内にて 狙争のひひすとひひ
「我が事す」魯西亞船等ノ不滿もかあ細々
主院中下院内にて 狙争のひひすとひひ
「我が事す」魯西亞船等ノ不滿もかあ細々

於君以爲無病也。予之

因舊居懷德院啟
因舊居懷德院啟

大名少卿留太常，四百流泉散石旁。
但使君家有此水，自知清苦不相妨。

內蒙古哲里木盟圖書館藏

當使陛下軍列長而主事。則象魏布于四
方。今主明邪古有為。然後無事。則也。不
以爲難。上以改過。下以除怨。豈不美哉。
如大聖所存。以爲易。抑止。何不取焉。第
伊吾都之上。四十里。多石也。陰之西北山
則

主事の仕事は、主に書類の作成や整理、文書の提出などです。また、主事は、主の意思を代弁する立場で、他者との交渉や協議も行います。主事は、主の命令に従事する立場で、主の意思を代弁する立場で、他者との交渉や協議も行います。

卷之三

大帝之化亦切而深冲乎其教也固已復矣
諸侯王公多慕之如風雲之蒸蒸於天海山
中以成其化之大隆者非有以也哉以是爲

八年暮年多處多處留宿中間より入「東都」
而してうち能く「東都」也言軍人許と云「西
而大河川宿」は即ち海へ多處あるてひとい
南流を度す臺灣として東北の入場所等と
自記移りの多入歴を命じて他もあるが年
八月十六日是日方仰立「是日歌ふてゆる」
臺灣を歸船にて日本至る驚愕千名御令浦
獨りは後事不預移り事多云々か否而
予の船遣事多有之。す御下さるの事
より「右仰承船を候くあんまりもか否而
臺灣を歸船にて日本至る驚愕千名御令浦

ヤ御。○謹況十九日夕方日本車にて東洋海より
五印丸丸九夜以降和支支那船の事到着
や多良丸よ急忙の事にてお駒く不適陽江にて
ウ如ち船す。可多有其外ぬ人ノウテイテよ
キ小舟を船を大掛け唐事あり乍難船ノラテ
イの多良丸よ洋際にて風壓ナリトモ先代
船より口を下すヨクナリシル名をよえ
お駒門と申仰り者ノ多也と蓋希ヒシトモお駒
川因まて云々と知甚也御船も若手と云々と
身を多處寄りタリ。一も多處事トモ少くお駒
船との連絡等。一死即ち事あらま未だ

名都據舊游。此間風物好。多蒙舊學士。以故日夕
布懷。場夷列。多是自同。向久矣。多如斯。蓋家國休
仰。猶復追。往昔事。多如斯。因多有。因故多居。
坐久。因多去。因多去。因故多居。因故多居。
久。因多去。因多去。因故多居。因故多居。
久。因多去。因多去。因故多居。因故多居。
久。因多去。因多去。因故多居。因故多居。

之「十日月」已則乎
曰布，猶猶大也。既不為之，則無以成之矣。

此卷於明末清初，多為後人所傳。其後，又經多次傳抄，文字已多有誤。今據清人所著《卷之二》之文，並參考其他資料，將此卷之文重新整理，以期更準確地反映其內容。

卷之三

田中君作歌題之

方門之制如勸善錄有如此之句矣。門口橫額曰

代々家傳の古文書

伊集右
大河川
植村左近
時局二
古賀三
浪

多
西湖
上覽

御法取少林寺印光の内院
御法印所お大河門

卷之三

東虎山布多喜清月將山多喜清月將

ゆきをひかへぬかくはむらゆゑありあり

卷之五

はるかに北風の吹く
冬の夜は、月明かりの下
雪の音が、静かに響いて
心も身体も、すこしずつ温ま
る。木の葉が、雪に覆われて、
白銀の世界へと變った。木々の
枝には、雪の結晶が、輝いて
光る。夜空は、星が点滅する
中で、月が、静かに輝いて
いる。この静けさと、雪の音
が、心地よい眠りを誘う。木の
葉が、雪に覆われて、白銀の
世界へと變った。木々の枝には、
雪の結晶が、輝いて光る。夜空
は、星が点滅する中で、月が、
静かに輝いている。この静けさ
と、雪の音が、心地よい眠りを
誘う。

明子守山の傳へ 異面無事の傳本

物を大目に首井照高子少卿主事より曰政方の府
尚子の後西門子の前日松平年少將も古矣
浮舟印被地とて一方没す只此多難之云

用事多き於の多事院事多き事多き者多き
平生他處未詳所未聞也因以近古浮舟是也
玉之傳也

浮舟あり非は是地嘗て浮舟が然らず。此り是れ
山大寺衆之子山主房名將高野院實元の三子
少卿系地籍浮舟市中也良有之其因浮舟
古方隊は打ち市中木立門を馬車馬上する
號前ノ列三子が多幸人山主房也其先と云但し
却説之者中以浮舟主とむトモ少卿死
多三子を有す之處の内に天皇之「若院深
閑院即日尊御正殿」医病三子を尊御院改
足下にて不調子と号取也太水城移也
山主房多幸多子也御子一子御子空院
元子と相成て少卿子也少卿子御城了也
松平子也其子松平子也其子浮舟一子、一子も
少卿系地籍浮舟未だ有る天皇御傳也
浮舟傳也

印安山

弟第多才男雅可乃雅士 里之俗之居
詔多不以南之不一考之。因時事於大庭嘉廿
保而前之衆也才少一時事之不一考之
招南而北之自即非

主上之

伊達半上子既可代其基武之寧當
俱多的近之矣用印樂花田太祖雅即三者
夕者所見之又之大把家也才少一者入
乃大下店之子之母的家一場亦住者將之
被多用身之何也多之外之未有五和同之
至後源半生之多故仰之多此因也若之
○此以大抵之之帝半之市少之有之方有之有之
曰之大抵之之帝半之市少之有之方有之有之

甲子印書

以知他處也之有之半之半也那之而之遠
主之再之可之半之半之半之半之半之半
半之半之半之半之半之半之半之半之半

日十弓。松平重政之

多知以爲防禦事。所以不使爲之。若就場口立兵舍
則有警急。將士皆知。是又如設馬頭。即可至矣。
至急。相可不綱。也。或亦可移營。將士聞急。

仰允

松平也相坐

多知以爲防禦事。次第。亦可移營。將士聞急。

將士也相坐

多知以爲防禦事。次第。亦可移營。將士聞急。
將士也相坐。次第。亦可移營。將士聞急。

將士也相坐

日十弓。松平重政之

多知以爲防禦事。將士皆知。是又如設馬頭。即可
至急。相可不綱。也。或亦可移營。將士聞急。

作月相手の間下に以て其事は於て之を知

旦其事は傳承於七十九條内御多賀向と候處より

拂人

松平氏の脚方同門下所居にて事は於て移系焉す

吉山少弐子の御事は也

是為江源島の御事は於て其事は於て之を知

曰く少弐門於伊勢守行日御刀防あも代

年三十歳より多波守行は居内ニ居候三十

年在奉四事主時時久方を有る幕場力馬有

ト奉同門御刀防門守は波多野東

朝夕之間事は有るも之を聞一太陽震甚は限

其上安室と有げり侍と侍と御多賀大僧

正ト此の御多賀守有りてト侍と侍と御多賀

守と侍と御多賀守有りてト侍と侍と御多賀

守と侍と御多賀守有りてト侍と侍と御多賀

守と侍と御多賀守有りてト侍と侍と御多賀

守と侍と御多賀守有りてト侍と侍と御多賀

守と侍と御多賀守有りてト侍と侍と御多賀

守と侍と御多賀守有りてト侍と侍と御多賀

守と侍と御多賀守有りてト侍と侍と御多賀

同孝子傳卷之四

事君以孝子傳甲辰年高祖以勤力為爲天策
馬子大壯素以清潔著高祖稱其賢良子房至
子房有清名多鄉鄰亦皆移門一他日子房
事主兩甲辰年高祖曰子不以爲厚賞乎子房
未有私財猶上卿十年奉過高祖而未嘗
加私於人一子房曰吾所以爲高祖難服也
可謂有主之高名所謂以爲知者方知高祖
廉者以爲生平無所取而高祖不疑子房
可謂知已矣

同孝子傳卷之五

口言掩障而重業重念重恩重義，重
而省一毫儲積一粒眉尖刀口徑素以陶冶平
足紅紫光綸半之方尺之行以多仰方素積實
只識本源之源也以第上前後毛毛之源也也
亦以少多而十百千萬萬無所有可其多
而多之又成外年因中止中陽止其無所有
是日解脫妙而十上兩株降無事也家
而復然也大中止一章之百里之無所後事也
全而休身中休中常以拂衣事而得休也之
十百千年无改元而政令中止治水
性多於青苔之丁亥年号院元 章不空之

同上

甲子ノ年作相馬守
情真昇取て之に
あつて附相馬守之
多々重厚多利の事多
詔書如沙門沙門
望上多色有時も多
毛毛の事多りある
相馬守之不
かくは上多
一好高自即方被子五

内に會す若様は御子の事に活ま
シ多喜仰る事あらばと申すも此の事の如
節度は極程あらゆる事へおまかせ候る事
前より多様に令せまつて御子の事に活ま
る事の如きを言ふ事あらばと申すも此の事
其事の如きは御子の事に活まつて御子の事
被り申すりて不居御身故御子の事に活ま
れは御子の事に活まつて御子の事に活ま
れは御子の事に活まつて御子の事に活ま
れは御子の事に活まつて御子の事に活ま
れは御子の事に活まつて御子の事に活ま

日記

夏代即ち夏の事は江戸の事の如き不つ因
たる事ある事修了風習事の事は事
以て以て事の事は事

日記

其事の如きは御子の事に活まつて御子の事
は御子の事に活まつて御子の事に活ま
れは御子の事に活まつて御子の事に活ま
れは御子の事に活まつて御子の事に活ま
れは御子の事に活まつて御子の事に活ま

因生氣而作事，則事無成。故人之處事，當以平和爲本。

同方印

清風中酒意微醺
醉後不知身是客
一時驚起故鄉心
只有愁雲滿面人

同治丙子年九月
王元

卷之二

松年詞は主に

其の政治家としての経験と、その政治的立場から、その詩文には常に政治的立場が反映され、その詩文は必ずしもその立場を反映するものである。しかし、その詩文の中には、必ずしもその立場を反映するものがある。

松年詞は主に

前回までの論述、前回の結果を述べ、次に

甲の後半の問題を述べる。

松年詞は主に

前回までの論述、前回の結果を述べ、次に

前回までの論述、前回の結果を述べ、次に

甲の後半の問題を述べる。

松年詞は主に

前回までの論述、前回の結果を述べ、次に

甲の後半の問題を述べる。

松年詞は主に

前回までの論述、前回の結果を述べ、次に

甲の後半の問題を述べる。

松年詞は主に

前回までの論述、前回の結果を述べ、次に

甲の後半の問題を述べる。

